

「否定、肯定」

2021年09月16日

高橋源一郎氏が『「ことば」に殺される前に』を上梓している。題名に惹かれて購入した。「帯」には「この国は否定の『ことば』に感染している」と書かれていて、なお更、興味を引かれた。今は、ツイッターの言葉が縦横に行き交っている。言葉の意味が判別できないほど、降り注ぐ言葉の中に生きているのが私たちの現実である。高橋氏は、このツールを利用して、言葉を発信したいと始めたとのことである。ツイッターを始めるに際し、八つの原則を定めた。最高の質の「ことば」を送ること。出版などをして、お金を発生させないこと。できる限り「肯定的」なものにすること。誤りがあった場合は、素早く訂正し、謝罪することなどである。本文に、「『ことば』は人を殺すことができる。そんな『ことば』と戦うことができるには、やはり『ことば』だけなのだ」と書いている。全く同感である。人は言葉を介して、他者と交流し、共に生きる文化を築きたいと願っていよう。ところが、それに破れ、言葉不信に陥り、分断されているのが、現実ではないか。高橋氏は、分断された社会に、「つながり」を回復する言葉を発したいと、本書を書いている。

本書から、刺激を受けて感じたことを書いてみたい。SNSで、人を誹謗中傷する言葉が飛び交って、苦しめられた人が自死することがあった。匿名で、言いたい放題なことを書いて、人を侮辱し、否定している訳である。許せないことであるが、私は、人を誹謗中傷する言葉を吐く人の心の闇を思う。彼らは鬱積した思いを吐き出し、いささかの安らぎを得たいと思っているのではないか。この否定からは、生きる勇気を得ることはできない。最近のベストセラーに『ケーキの切れない非行少年たち』がしばしば挙げられている。ケーキを三等分に切るように指示しても、切れない少年たちがいる。著者の宮口幸治氏は、それらの少年たちの恵まれぬ出生、育ち、教育環境などを分析している。被害者を守ることは大切であるが、犯罪に走る動機と状況を的確に把握することが大事であると、私は思っている。刑罰で犯罪を減らすことはできない。犯罪に走らせない環境を作るために、人、社会は何をすべきかを模索すべきである。

高橋氏が言うように、最近、私たちの周りには否定的な言葉が満ち溢れている。そして、否定的に言うことが、世の中を正しく認識し、知性的なことであるかのような響きがある。確かに、否定的にしか見えない現実があり、安価な肯定はできない。しかし、人との関係を切るような否定は、深いニヒリズムに陥っていくのではないか。高橋氏は、正しさをかざして、他を否定することの独善性を鋭く指摘している。

この否定、肯定に関し、キリストの福音理解に関わって思うことがある。パウロは、人間の罪をリアルに指摘し、その罪が赦されたキリストの十字架の福音を語っている。彼はユダヤ人であったから、律法に違反した罪の認識は鋭く、深い。しかし、罪は赦されていることを知った時、認識できるのではないか。暗闇の中にいる時、自分は暗闇にいるとは認識できない。光に照らされて、初めて闇が見えるのである。律法から福音ではなく、福音から律法、即ち、赦された者が自分の影、罪を知るのである。その罪が赦されている福音を信じた時、否定されるべき自分が神に肯定されている救いを得ることができる。その者は、神に立ち上がらされていく。私は、否定的な言葉を聞いた場合、その言葉の背後に、肯定する光を見ているかどうか注目する。肯定に裏打ちされた否定には、人と社会に対する優しい思いが必ず、見て取れる。パウロは、キリストにおいて神の「然り」が実現したと強調している。教会は、神の「然り」を聞いた群れとして、この肯定を宣教する。その宣教において否定的な言葉があっても、それは、人を結び付けていく力ある言葉になる。